

# 薬草だより

## 座ればボタン…

樋口 剛央\*

**生薬名：**ボタンピ（牡丹皮）

**薬用となるボタンピの基原植物：**

・第十六改正日本薬局方（2011年）

*Paeonia suffruticosa* Andrews (*P. moutan* Sims) (ボタン科)

**薬用部位：**根皮



ボタン（提供：橋本竹二郎氏）

ボタン（牡丹）は株丈2mを上回るほどの落葉低木です。しかし、近年一般的に流通している園芸用株では、同属のシャクヤクの根に接ぎ木しているため、大きくは育ちません。春の彼岸の時期である4月下旬頃に、「百花の王」と言われる風貌漂う直径20cmにもおよぶ見事な大輪の花を付けます。春の彼岸の供え物の「牡丹餅（ぼたもち）」の名の由来となっています。（ちなみに秋の彼岸の供え物「おはぎ」は、秋の七草の1つである萩に由来しています。）

奈良時代に中国より渡来したとされており、以来その美しい花は人々に愛されてきました。ボタンが最初に登場した文学は『枕草子』です。芸術の分野でのボタンといえば、南禅寺の方丈広縁の欄間、左甚五郎作「牡丹に唐獅子、竹に虎」の図柄が有名です。唐獅子にとって牡丹の花の下は、安心して身を寄せることのできる安住の地であるという意味があるそうです。そのほか一般的に「牡丹に唐獅子」といえば「百花の王」と「百獣の王」の組合せであり、「取合せのよいもの」の例えとして活用されています。

ボタンは花が美しいだけでなく、生薬としても古来より清熱涼血、駆瘀血薬の代表として重用され、中国最古の本草書である『神農本草経』にも中品として収載されています。「立てばシャクヤク、座ればボタン…」は美人を形容する諺として有名ですが、座りこんでばかりいる女性は瘀血の状態であり、ボタンピを服用すると良いとの意味も隠れているそうです。ボタンピを含む桂枝茯苓丸はまさに駆瘀血薬です。このほかにもボタンピを含む駆瘀血剤には、大黃牡丹皮湯、温経湯、加味逍遙散、牛膝散、折衝飲、芎歸調血飲があり、別の効果を持つ頻用処方には八味地黄丸があります。